

鳥取大学乾燥地研究センター平成4年度共同研究発表会に参加して

東京大学農学部 森田茂紀

1992年12月17-18日、鳥取市の対翠閣において鳥取大学乾燥地研究センターの平成4年度共同研究発表会が開催された。17日には同センターの客員教授であるI-Pai Wu氏の特別講演「The significance of drip irrigation on arid land agriculture」の後、共同研究Ⅰ「乾燥地条件下における土壤・大気・水の物理的特性に関する研究」について11題の講演発表が、また18日には共同研究Ⅱ「乾燥地条件下における植物の生理・生態ならびに生産に関する研究」について12題の講演発表がそれぞれ行なわれた。都合で18日しか参加できなかったが、共同研究Ⅱの中で直接根に係る発表としては、原田二郎・稻永 忍：不均一な土壤水分がコムギの根系の発育と吸水に及ぼす影響、山内 章・稻永 忍：作物の耐旱性における根系構造の生態的意義に関する研究ーとくに陸稲と水稻の比較ー、小葉田亨・稻永 忍：乾燥土壤条件下における禾穀類の生理反応と水吸収ー根圏域乾燥を敏感に反映するトウモロコシの葉身伸長速度ー、などがあった。この共同研究発表会は例年12月に開催され、講演要旨集が発行されている。

---

投 稿

言葉にみる「根」

数年前にアメリカで「ルーツ」という映画がヒットした。日本でも最近、「ネクラ」という言葉が大流行した。このように「根」は言葉の中で今でも人々に広い「支持」を集めている。

「根」がつく言葉は「葉」「茎」のつく言葉だけでなく、「花」や「実」のつく言葉より多いのではないかろうか。このため、「根」は広い意味を持たされて、言葉の中で使われている。

「根」の持つ意味を多少強引に分類すると『みなもと』という意味で使われる場合が最も多い。「根源」、「根拠」、「根幹」などがそれであり、「ルーツ」もこれに含まれる。次に多いのが『しづとくて動かないもの』という意味で、「根気」、「根強い」、「根深い」など。雪国で春まで残る積雪を示す「根雪」もこのひとつである。また、人の『心や精神』を示すものに「根性」、「根にもつ」、「根くらべ」、例の「ネ克拉」などもある。さらに、『暗くて不明なもの』という意味では「根の国」（よみの国と同じ意味）というのがあるらしい。逆に『答え、明らかな解答』ということばでは数学で使われる文字通りの「根」や「平方根」というのがある。このように、「根」は多くの意味で使われているが、植物の根の重要な機能のひとつである吸収を表現した言葉が見当らないのは意外であった。

多くの「根」に関する言葉の中で最も意味が分かりにくかったのが「根まわし」。どうやらこれは果樹などの木本で樹体を健康にしたり、果実の品質を良くするために木の周辺で根を切る処理を行うことのようであり、樹木の専門家や農家の方にとってはごく常識的な言葉であることを知り驚いた。

植物の根は不思議な多くの機能を持っているが、それ以上に人間の想像力は根の特徴を多角的に捕らえている。その結果として作られた人間の言葉は、今でも人間の社会に深く根をおろしている。

(自称「根」研究家)